木のマイスターたちの群像
小さなミュージアム

Nakamura Kazuyuki
中村一行

クリスマス作品が名高いミュラー社

（Müller GmbH 一八九九―）

このミュラー社は一八九九年の創業である。現当主のリンゴ・ミュラー（Ringo Müller 一九七〇―以下リンゴ）で四代目となり、現在、姉のアニャ（Anya 一九六三―以下アニャ）と共に経営に当たっている。筆者が二〇〇二年の十二月に初めてザイフェンを訪れた際、「既に日本には総代理店があるので貴社と直接取引関係を結ぶことはできないが、別の輸出専門の卸売商を紹介してあげよう」と親切に言ってくれた社長との幸運な出会いがあったと本誌二八五号一四六頁にて記述したが、その恩人がこのリンゴである。

リンゴ（右）と姉アニャ（左）（2007年筆者撮影）

立地

本社屋はザイフェン中心部を東西に貫くハウプト通り（Hauptstraße）と称される中心街を、ブンテスハウス（Hotel Erbgericht Buntes Haus）といわれるホテルのある交差点から東に四～五〇〇m程たどると道の左手一三二番地にある。

この土地は、後述するリンゴの曽祖父であり創業者でもあるエドムント・オズヴァルト・ミュラー（Edmund Oswald Müller 一八七七―一九四三、以下エドムント）が一九一四年に取得したもので、この中に本社機能と工房があり、リンゴもマイスターであることから、二〇〇六年の筆者訪問時点では

ここで母、姉と共に作品の組立に当たっていた。

同社にはこの本部の他に工場もあり、ここで四十～五十人の従業員により原木の製材、乾燥、整形などの基礎的加工作業が行われているのであるが、こちらは本社からハウプト通りを更に東に数百m程たどった地点の道路右側にあり、三〇〇〇㎡もある大きな建物である。

ザイフェンでは細々と家内工業的に制作する作家と、家族経営ではあっても従業員を増やして企業として発展させようという作家との二つの潮流があることを本誌二九八号、一五四―一五五頁にて指摘したが、リンゴはこの後者の途を歩む代表格である。工場の物理的拡張だけではなく、革新的なアイデアを取り入れた作品制作に常々取り組む姿勢も顕著であり、この革新的なところが同社の特徴であり、伝統でもある。

略史

一八九九年、同社はリンゴの曽祖父エドムントが妻のリナ（Lina）と創立した。最初に使用した工作用木工旋盤はリナの父であり、エドムントの岳父オズヴァルト・ランガー（Oswald Langer）から借用したものといわれて

ハウプト通り132番地の現在の本社屋（2018年筆者撮影）

本社屋内で作業中の母レギーナ（左）、姉アニャ（中）、リンゴ（右）（2006年筆者撮影）

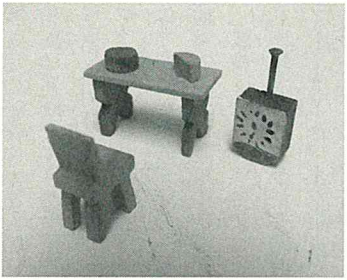
ハウプト通りにある工場外観（2018年筆者撮影）

工場内部（2006年筆者撮影）

いる。

創業当時は様々な作品を手掛け、木工の玩具、マッチ箱に入る大きさのミニチュア、ドールハウス用のミニチュア家具セット、ミニチュアカー、装飾の付いた小箱、ローソク立て等の制作を試みている。

創業者、曾祖父エドムント（右）と妻リナ（左）（同社カタログより2018年筆者撮影）



エドムントの頃制作されたミニチュア家具（2018年筆者撮影）

一九二六年にはライプチッヒで開催された見本市にも初出展し、この時、出展用商品カタログを同社としては初めて制作したという。

一九二九年頃は世界大恐慌の余波で厳しい時期を過ごしたが、一九三六年、エルツゲビルギッシェ・クラインクンスト（Erzgebirgische Kleinkunst）を社名として商標登録し、それが現在の社名であるクラインクンスト・アウス・デム・エルツゲビルゲ・ミュラー社（Kleinkunst aus dem Erzgebirge Müller GmbH）の基となっている。

ミュラー社ロゴ（2018年筆者撮影）

一九四三年、エドムントが没するとリンゴの祖父であるパウル・ミュラー（Paul Müller 一九〇〇―一九八三、以下パウル）が妻のルイゼ（Luise）と共に工房を継承した。

パウルはエドムントが手掛けたミニチュア作品の制作を続け、特にニスを塗らない艶消しの作品群により国際的にも評価を得るようになった。が、第二次大戦下に社業を発展させるのは困難を極め、一九四四年頃には制作する材料にも事欠く中、政府の要請で兵器、

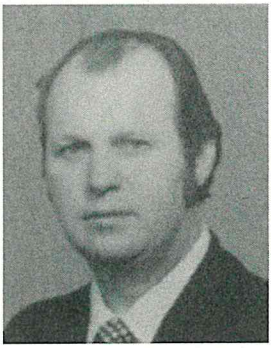
祖父パウル（同社カタログより2018年筆者撮影）

弾薬用の容器や木箱も制作した。また戦後は進駐してきたソ連に作品やデザインを没収される危機にもさらされたが、幸い当時の作品群がミニチュア主体であったため、そのデザインを守り通すことができたとか。

戦後はミニチュア家具などのインテリア用品よりも生活必需品であるタバコケースとか、まな板などの生産に追われたが、少数のミニチュア家具も再び生産を始めた。

一九五六年、この年もライプチッヒの見本市に出展したが、これが当時としては最後の出展となった。東独政府により個人が直接海外の顧客向けに輸出することを禁じられ、全て国営公社に納品することを義務付けられた結果、個人工房として見本市に出展する意味がなくなったのである。

一九五七年、リンゴの父グンター・ミュラー（Gunter Müller 一九三四―以下グンター）が工房に参加し、『クリスマス・ピラミッド』の制作を構想するようになる。これを機に従来型のミニチュア作品からは徐々に脱皮し、クリスマス・ピラミッドやシュビップボーゲンなどのクリスマス商品を指向するようになった。従って、グンターが大きく社の方向を変換させたのであり、今日、クリスマス作品で名高いミュラー社の基礎を作ったといえる。


父グンター（同社カタログより2018年筆者撮影）

一九五九年、生産を生活必需品から再びエルツ山地地方の伝統工芸品に特化することができるようになり、初めて二種類のクリスマス・ピラミッドが制作された。

一九六〇年頃、東独政府の政策により木の材料の入手が著しく困難となり、一九六二年にはその不採算性からミニチュア家具の制作を完全に中止する。

一九六三年、クリスマス作品を中心により高級な作品群を幅広く手掛けようと、エルツ山地を象徴する『天使と鉱夫』デザインのローソク立てを制作し人気を博したが、東独政府により重要輸出品に指定され主に輸出用に回された結果、東独国内向け供給が殆どできない状態に陥ったという。

一九七三年、グンターが妻のレギーナ（Regina）と共に工房を正式に継承。グンターはデザインを考える時、図面よりも先に模型を作るタイプで、いつも図面は後付けであったという。

一九八五年、初めて多層型のピラミッドを制作するようになり、これが今日、同社を代表する作品として評価されているピラミッドの原型である。

一九八六年、東独政府の給与抑制政策により、従業員数が三人にまで制限されたが、商品の需要は高まる一方で、従業員の負担が過大になった時期であ

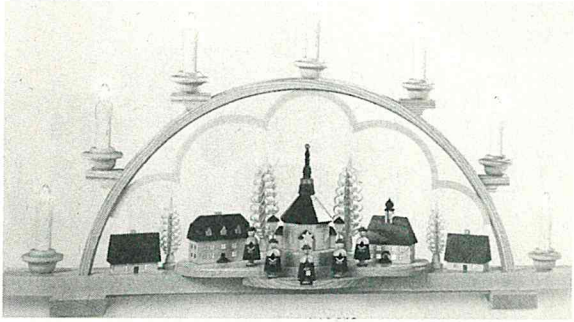
る。

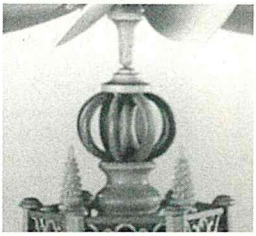
一九八九年、東独政府が瓦解すると、それまで国営工場から来ていた輸出用の発注が全てキャンセルされ、なおかつ輸出先顧客リストが開示されることもなかったため、自分でフォローすることができず、生産が殆ど止まるという非常事態に直面した。その状態は一九九〇年にリンゴが経営に参加し、再び顧客に直接販売ができるようになるまで続いた。

一九九四年、リンゴはマイスターの資格を取得し、四代目候補として本格的に工房経営に参加した。マイスター資格取得のための審査用作品は電球内蔵型の大型シュビップボーゲン『ザイフェンの村（Seiffener Dorf）』であった。それは当時としては初めての電飾式大型のシュビップボーゲンであったといい、アーチ外側のローソク型電飾のみならず、その下に飾られている家の内部からも灯が漏れてくるという、当時としては革新的なものであった。

また、リンゴはシュビップボーゲンのアーチの下に雲形の装飾を付け、作品の優美さを増すことを図った。

そればかりではなく、リンゴは、クリスマス・ピラミッドのプロペラ直下に透かしの王冠型の装飾を付けることも考案した。





上：リンゴのマイスター資格審査作品『ザイフェン村』（同社カタログより2018年筆者撮影）、中：リンゴによる雲形デザイン装飾（同社カタログより2018年筆者撮影）、下：リンゴによる王冠型デザイン装飾（同社カタログより2018年筆者撮影）

今日、この雲形と王冠型の装飾はミュラー社の作品を象徴するロゴ的存在となっている。こうして自社作品を他社作品と差別化した上で、聖歌隊、オルゴール等、その他作品と共に直接の輸出に乗り出したのである。

一九九九年、リンゴの姉のアニャも経営に参加。同年、創業一〇〇周年を迎えると、伝統と形（Tradition und Form）により、その高い品質とデザイン、並びに優れた技術水準が評価され、同社は特別賞を授与された。

二〇〇一年、リンゴが正式に工房を継承。

二〇〇四年、グンターの考案した

2004年、「歴史と形」特別賞を受賞して喜ぶグンター（右）とレギーネ（左）（2018年筆者撮影）

グンター制作の『古都ドレスデン』（同社カタログより2018年筆者撮影）

シュビップボーゲン『古都ドレスデン（Alt Dresden）』が一九九五年から始まった伝統と形（Tradition und Form）十周年を飾るものとしてふさわしいと、特別デザイン賞を受賞した。

作品

一、クリスマス・ピラミッド

略史で述べたように、クリスマス・ピラミッドの制作は工房二台目パウルの時代の一九五七年、リンゴの父グンターが工房に参加するようになってから模索されるようになり、最初の作品が作られたのは一九五九年である。この時の作品はステージが一層で三本の柱の柱頭をプロペラの下で束ねた三角形の構造であり、本誌二八八号一六五頁にて、マックス・シャンツが一九四三年に考案したと紹介したデザインと同類型である。

グンターはクリスマス・ピラミッドの開発に情熱を燃やし、工房を継承した一九七三年以降、更にピラミッド各層のステージ間の支柱を強化し、一九八五年には全体のイメージを豪華にした多層型ステージ作品を発表した。以来、多層型の豪華なクリスマス・ピラミッドは同社を代表するものとなり、高さ四十cm程のものを中心に現在は二十種類を超える作品が制作されている。

制作に際しては一つの木の素材の中で使用される部分は約三五%、残りの六五%は廃棄されるという程素材を厳選している。また、モチーフは『聖誕』を対象にしたものが圧倒的に多く、最大のものは五層、高さ一五〇cmにもなり、六五〇個もの部品が用いられているとのことである。

高さ150cmのクリスマス・ピラミッドと並んで立つリンゴ（2004年筆者撮影）

二、シュビップボーゲン

シュビップボーゲンもグンターの時に構想が重ねられ、その意を汲んだリンゴが『ザイフェンの村『(Seiffener Dorf)』という作品名で、マイスター資格審査作品として、一九九四年にザイフェンの教会と聖歌隊をモチーフにしたシュビップボーゲンを制作したこと、及び同時期、グンターもドレスデンの聖母教会をテーマとした『古都ドレスデン（Alt Dresden)』という名のシュビップボーゲンの制作に取り組み、二〇〇四年には実物を忠実に再現したデザイン力とその高い品質に対して特別デザイン賞を受賞したことも略史で述べた。

ドレスデンは第二次大戦末期の一九四五年二月一三～一四日、米英空軍による爆撃によって壊滅し、三万五千人の市民が亡くなっている。一七二六年から一七四三年にかけてゲオルゲ・ベール（George Bähr）により建築された聖母教会もこの爆撃による火の海の炎熱の巻き添えとなり、二月一五日に倒壊した。

東独時代は瓦礫の山のままであったが、東独政府が瓦解すると一九八九年秋に聖母教会の再建を目指す市民運動が発足し、献金によりこの神の家を再建するという意思と協力の呼びかけが「ドレスデンからの呼びかけ」という形で全世界に向けて発信された。

シュビップボーゲン『古都ドレスデン』を前にするリンゴ（2004年筆者撮影）

この呼びかけに応じて、ドイツ国内のみならず世界的にも献金が相次いだのであるが、エルツ山地地方の木工職人たちも聖母教会に因んだ作品を制作し、その売上の中から多くの献金をしたのである。グンターがこの時期に聖母教会を主題に『古都ドレスデン』というシュビップボーゲンを完成させようとしたのにもこうした背景があった。

破壊前の聖母教会、『ドレスデン聖母教会再建への呼びかけ』より2018年筆者撮影）

破壊後の聖母教会『ドレスデン聖母教会再建への呼びかけ』より2018年筆者撮影）

一九九四年五月、瓦礫除去作業を終えて聖母教会の再建工事が始まると、十八世紀の建築当時同様にザクセン産のエルベ砂岩が建材として用いられたことの他、特筆すべきは、残っていた廃墟並びに瓦礫の中で形を留めているものを再利用しながら再建する、というジグソーパズル式の気の遠くなるような作業がなされたことである。その結果、再建された建物には新旧の部材が混在し、まだら模様となっている所が多いが、それがまた、この建物にかけたドイツ国民の特別な思い入れを表すものとなっている。

再建工事は二〇〇六年のドレスデン建都八〇〇年までには完成させようと急がれたが、幸いその前に完成し、二〇〇五年一〇月三〇日～一一月一日にかけての三日間、祝賀会が開かれ、ドレスデン市民を中心に約二五万人の参加者が「平和が皆と共にありますように（Friede sei mit Euch）」という胸章を胸に掲げてその再建を祝ったのであった。

再建後の聖母教会（2006年筆者撮影）

このグンターの作品『古都ドレスデン』については二〇〇五年、リンゴが更に改良を加え、聖母教会の鐘の音をCDに録音してその音源を作品の台座下部に装着し、随時それを聴くことができるようにして発表した。作品に音による臨場感を加えたのである。本稿の「立地」のところで、革新的なところが同社の特徴と伝統であると述べたが、作品に音響を取り入れるということを先駆的に行ったのがリンゴであり、同社の革新的な伝統を踏まえた動きとなっている。

2005年10月30日～11月1日に行われた教会再建祝賀会参列者の付けた胸章（2018年筆者撮影）

三、オルゴール

この、音響を付加して作品の価値を高め更にその仕組みを進化させる、という点について、リンゴは他の作品でもその真価を発揮している。いい例がオルゴールである。オルゴールは伝統的には数曲の音楽をピンで弾いて奏でる機械装置をオルゴールメーカーから調達し、それを作品に組み込んで制作されるものであった。従って奏でられる曲数は少なく、メロディーも固定的であるのが普通であった。リンゴはここを改善するためにオルゴールの台座部分とその上部を回転する装飾部分とを分離し、奏でられる曲によってその上部装飾部分を交換できるようにしたのであるが、それを可能にしたのがその台座部分の革新的装置である。即ち、

台座部分に従来のような機械装置を装着するのではなく、地元ケムニッツ工業大学コンピューターサイエンス部（Die Fakuität für Informatik der Technischen Universität Chemnitz）と三年にわたる共同研究の末、無線でコンピューターや携帯電話と接続して好きな曲を取り込んで演奏できる装置を開発し、それを台座部分に組み込んだのである。これは従来のオルゴールに対するイメージを一変させる革新的技術であり、今後の動きが注目される。

オルゴール三態。完成形（右）、上部（左上）、台座（左下）（同社カタログより2018年筆者撮影）

四、煙出し人形

同社を代表する作品はクリスマス・ピラミッドとシュビッップボーゲンであった。これはグンターの育んだ路線であったが、リンゴはそれらやオルゴール作品に革新的音響技術を持ち込んだだけでなく、伝統的なくるみ割り人形や煙出し人形も重要視して試作を続け、二〇〇四年から本格的に煙出し人形の制作に乗り出している。当初はエルツ山地地方の典型的モチーフを次の画像の様な十四cm程の低い身長、丸い腹部のデザインで発表した。

ついで、もう少し背の高い二十四～二十五cmのものも制作し、モチーフもエルツ山地地方だけでなく、全ドイツ、中東等、民俗的モチーフを世界的に求めるようになっている。

更に二〇一〇年には『ミュラーちゃん』（Müllerchen）と称するモダンな作品も開発し、同社のマスコット的役割を担わせようとしている。

2004年、最初に制作された短躯で胴回りの丸い煙出し人形（同社カタログより2018年筆者撮影）

次いで制作された普通体躯の煙出し人形（2018年筆者撮影）

2010年来制作されている愛称『ミュラーちゃん』の煙出し人形（2018年筆者撮影）

五、その他作品

この他にも同社は様々なデザインのミニチュアのクマやウサギも制作し、その幅広い作品群と品質の高さは現地でも筆頭格である。

今　後

リンゴはエルツ山地地方の諸作家の中でも、その革新的な指向と技術で抜きんでており、ザイフェン、エルツ山地、ドイツ、という地域的な枠を超え、全世界的な発展を指向している。リンゴの後継者がその家系にいるかどうかは目下不詳であるが、この革新的、かつ緻密なリンゴのもと、次世代への布石も当然打たれていると見る。若干心配なのは、革新的であり高品質である作品群がその分高価になっており、一般消費者の手に届かない水準になりつつあることである。

『クマの夫婦作品』（同社カタログより2018年筆者撮影）

参考文献

ミュラー社カタログ二〇一七年版

『Hauptkatalog 2017』

『ドレスデン聖母教会再建への呼びかけ』ドレスデン聖母教会支援協会

Steiner & Steiner

（有限会社カルニー代表取締役・「小さなミュージアム」館長）